

個性の強いなかに敢えて飛びこみバランス感覚を磨く

構造家・下久保 亘

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■横浜国立大学で

下久保亘さんは、1971年生まれで愛知県東海市で高校まで過ごした。大学・大学院ともに横浜国立大学の出身。工学部へ進んだのは父親が工務店をしていて、建築に馴染みがあったから。現在、下久保さんは構造設計事務所を営むが、「メイホウ・オンスタジオ・アソシエイツ」は父の会社の社名を継いでいる。今も郷里のR-Span建築システムを販売する組織にかかわり、施工時の構造設計者で参画しているのです。入学当時の横浜国立大学は、飯塚五郎蔵教授が構造学の要であった。下久保さんは、青木博文先生の研究室でデッキプレートの剛性の研究をしていた。国立大学の大学院で構造を学んだ学生の多くは、大手ゼネコンか鋼材メーカーに就職するのが定番であった。しかし、下久保さんは構造を専攻しながらも、意匠設計にも興味を覚えていたようで、設計事務所のSKMでアルバイトをしていた。それは、教鞭に立っていた建築家・北山恒さんが憧れの存在だったからかもしれない。就職活動をしないう下久保さんに、アルバイト先の所長が「構造をやっているなら構造事務所を紹介しよう」と声をかけてくれた。構造家・今川憲英さんのT.I.S.&PARTNERSの門を叩いたのは、そんな経緯があったのでした。

■「今川憲英流」を22年

一流のアトリエ構造設計事務所は、新人に一から手解きしないのが常だ。1か月ほどの足慣らし期間を終え、担当建物をもった。実務経験は、意匠事務所でのアルバイトしかない下久保さんにも容赦はなかった。担当建物はRC造5階建の建物だったが、「荷重から始まり安全率で終わる？ その間や前や後は？」と心で叫びながらの船出だった。四苦八苦する中で、先輩の大内彰さん（エスフォルム）には助けられたと語る。担当建物の意匠設計者とは、20年を経て今も

交流がある。下久保さんの生真面目で実直な人柄は、構造との向き合い方にも出ている。今川さんは「できる！からはじめるのが構造だ」という主義だから、慎重派として葛藤もあったはず。それが22年間を今川さんに仕え、番頭までになるとは、本人も驚きです。裏話があればと覇志堂は会話を続けるが、下久保さんからは師匠への感謝以外出なかったのです。

■建築家・新居千秋に仕込まれる

新居千秋都市建築設計とは、2009年に日本建築大賞（日本建築家協会）を受賞した「大船渡市民文化会館・市立図書館 リアスホール」を担当するなど、協働があった。独立してからも声がかかるのは誉である。パワフルな新居千秋さんと、下久保さんの付き合い方には興味があるところ。本誌2023年12月号の表紙になった「バイオフィリアプレイス南青山」もその一つ。オーナーの拘りと建築家のコンセプトが合致するまでのハードなプロセスは、誌面からも伝わる。そもそも、本プロジェクトは熱の籠ったプレゼンテーションで勝ち取ったと新居さんも書いている。下久保さんが積み重ねて来た構造設計者の力と、新居さんの個性と主張を知り尽くしている所員の清野貴夫さんが、エスキスを繰り返したであろう。

圧倒的なパワーをもつ人に会おう宿命の下久保さんは、相手を尊重しつつ主張すべき所は曲げずに折り合いをつける。趣味は、トライアスロン！。泳いで、自転車を漕いで、拳句に消耗した体力で走る過酷なスポーツ。新居さんなど建築家の尽きない要求に取組む構造設計にも似ている。下久保亘さんは、師匠の今川さんがいう「できるから始める構造」を最後までやり切る構造家なのです。

